『東奥日報』2007年1月7日

きょうを読む

人と人の間にある「希望」

大切な家族と友だち

玄田 有史

新年となると、「今年（こそ）は希望に満ちた一年になりますように」と祈りたい気持ちになる人も多いだろう。そもそも希望を持って生きている人はどれだけいるのだろうか。希望を持ちたいという人には何が必要なのだろう。

そんな希望についての問題を社会とのかかわりから科学的に考える希望学という研究が、私も所属する東京大学社会科学研究所で行われている。その研究のひとつとして昨年全国の二十歳から五十九歳の約二千名にアンケート調査を実施した。そこでは個人の生活ぶりとならんで希望の保有状況について詳しく質問してみた。その結果の一部を紹介してみたい。

格差の拡大が社会問題として語られるようになり、経済的な貧富とならんで、教育機会や就業機会の格差も広がりつつあるといわれる。そのような状況のなかで、将来に対して希望を持てない人も少なくないという指摘もある。

アンケートでは将来実現してほしいことや実現させたいことという意味での「希望」を現在お持ちかたずねてみた。その結果、回答者全体の78%が、自分は何らかの希望を持っていると答えている。希望の中身を複数回答でたずねると、仕事、家族、健康、遊びの順で多くなっていた。さらに、そのうち63%は、希望は実現するだろうという見通しを持っていた。希望がないといわれながら、実際には相当数の人々は身の丈にあった希望を抱いて生きている。

多くの人が実際には持っている希望ではあるが、希望を持つことにはどんな意味があるのだろうか。調査によると、希望を持つことで元気に生きていけるという人が58%と最も多かった。希望は生きる元気の源だ。

そんな希望は、生きる上での幸福感と密接に関連している。現在幸福を感じている人は、希望を持っている人のなかで84%に達するのに対し、希望を持っていない人では74%と、大きな違いが存在する。やはり希望は充実して生きていくには必要なのだろう。

では、どうすれば希望は持てるのだろうか。裕福で何でも購入できる人ほど希望を持ちやすいかといえば、そんなことはない。調査では年収の多い人ほど希望を持っているといった傾向はなかった。

むしろ希望に重要なのは、家族のあり方である。調査によれば、配偶者や子ども、親、兄弟姉妹、親せきなど家族が自分の能力や努力を高く評価してくれていると感じている人ほど、将来に希望を持っている傾向は強かった。現在もそうであるが、子どものころから家族に期待され、信頼されてきたと感じている人ほど希望を持って生きている。

もう一つ、希望を持つために大切なのは友人の存在である。調査の結果からは、友人の多い人ほど希望を持っていることが明らかに多かった。反対に自分のことを親身になって心配してくれたり、期待してくれる存在が誰もいない人は希望を持つのが難しい。

さらに友人との関係で興味深い結果もあった。家族などの血縁や地縁、そして職場の人間関係を超えた、それ以外の友人のなかに、自分を理解し、受けとめてくれる存在がいる場合ほど、人は希望を持つことができるようなのだ。

その結果を見て作家の田口ランディさんが書いていたご自身のエピソードを私は思い出した。茨城県に暮らしていた彼女には、十七歳のとき、東京の真ん中で一人の大人との強烈な出会い体験がある。十四歳のときからあこがれ、それまで手紙だけでつながっていたその人は、それまで出会ったこともない「リアルな異物」だったと彼女は表現している。私が私を知り、人生の指針を得る上で重要なのは、自分の価値観を叩きつぶすほどの力を持った存在との遭遇なのだとも感じている。その大人は、寺山修司だった。（「できればムカつかずに生きたい」新潮文庫）

希望は、人生の指針である。それは人と人の間に存在する。そんな希望は、家族のような自分を絶対的に肯定してくれる優しさに包まれた間からはぐくまれる。そして同時に、日常を越えた、ときにギリギリ、ドキドキする人との出会いやつながりから生まれるものでもあるのだ。

げんだ・ゆうじ　東京大学社会科学研究所助教授。1964年生まれ。経済学博士。88年、東大大学院経済学研究科博士課程退学。ハーバード大学客員研究員、学習院大学教授を経て2002年から現職。著書に「ニート」「仕事のなかの曖昧な不安～揺れる若年の現在」などがある。

あすを考える

毎週日曜日付に掲載します